



今、遺伝カウンセラーとして

安藤 記子



読者の皆様は「遺伝カウンセリング」という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。遺伝学的な研究解析手法が急速に発展するに伴い、私たちの身体に関しても「遺伝子」の働きが及ぼす影響が明らかとなってきています。このような遺伝医学の急速な発展に伴って遺伝カウンセリングの重要性が認識されるようになってきています。「遺伝カウンセリング」とは、米国において始まった概念であり、わが国でもさまざまな定義されています。それらをまとめると「遺伝医療を必要としている相談者（クライアント）に対して、遺伝医療に関する専門家（臨床遺伝専門医や認定遺伝カウンセラーなど）がクライアントの問題を理解し、適切な遺伝情報や社会の支援体制などを含むさまざまな情報提供を行い、心理的・社会的サポートを通して、クライアントの自己決定を支援し、健康管理や人生設計に役立てられるよう援助すること」となります。「第一子が遺伝性疾患であるが、次の子はどうかの?」「いとこ婚はよくないって聞いたのだけど、そうなの?」「高齢出産になるのだけど、遺伝的なリスクって何?」……と、遺伝カウンセリングにおける相談内容はさまざまです。読者の皆様は、「遺伝子」や「遺伝」についてご存知の方が多くかと思いますが、一般人は「遺伝子」「遺伝」という言葉は知っていても、それがどのようなものであるのかについての知識は少ないものです。

遺伝子研究から遺伝カウンセラーへ

私は農学系大学院修士課程修了後、食品会社で研究員として勤めていました。食品微生物における遺伝子の機能解析や食品開発への展開を視野に入れた研究開発をしている中で、「パブリックアクセプタンス」について考えさせられるようになりました。自分たちの研究成果がよいものであるかと思っていても、それが一般消費者にとってもいいものであるかどうかは別物であり、その基盤にあるものは「一般消費者がその技術や利点を誤解なく理解してくれるか」というところにもあるのではないかと考えたのです。私は、大学院から社会人にかけて、遺伝子に関わる研究に携わっていましたので、遺伝子や遺伝についての情報をわかりやすく一般の人に伝える役割を担ってみたいと思うようになりました。実際、遺伝理解に関する海外における研究報告で「遺伝子は身体の中の

どこにあると思いますか?」という質問に対して「Everywhere/All over body/Each cell」と答えた人が35%弱だったのに対し、「Brain/Mind」と答える人も20%強いました。もちろん、この結果だけで一般人に遺伝の知識がないというわけではありませんが、わからないことが多いというのは明らかな事実だと思います。医療の領域では、遺伝子診断や出生前診断など、ある一時の決断がその後の人生を左右することもあり、クライアントが遺伝や遺伝学的検査に関する情報を正しく理解することの重要性は高い分野であると思います。

私自身は昨年秋に認定遺伝カウンセラーの資格（日本人類遺伝学会および日本遺伝カウンセリング学会の共同認定資格）を取得しました。現在、大学院の博士課程に所属しており、現場で働いているわけではありませんが、研究などでお会いした方や患者さんの想いなどを聞かせていただく中からも、遺伝カウンセラーのできることにについて考えさせられます。がんの患者さんの中には、がん患者さんが家族に多い方がいて、中には優性遺伝性疾患の形式で遺伝するタイプがあります。患者さんは遺伝のことについては素人である場合が多いので、「家族に癌が多いので、自分もなると思っていた。」と話されたり、逆に「家系にはがんの人がいないので、自分は関係ないと思っていた。」とおっしゃる方もいます。実際のところは、それぞれの家系における情報をきちんと入手し、今までの知見を含めて、適正な情報を提供することが必要となります。また、情報に加え、それから派生する心理的問題も多々あり、特に疾患を患うことからくる特有の不安など（遺伝に関係ない）にも対応していかなければなりません。これらは別々に派生するものではないのです。例として、癌領域における話を挙げましたが、遺伝情報が疾患に及ぼす影響は、すべての診療科において問題として取り上げられ得るべきものであると考えます。クライアント一人一人の遺伝に対する考え方や感受性、事前の知識、理解力、不安の大きさ、医療に対する信頼感などはさまざまで、それらを総合的に判断し、そこから発生する心理的問題・倫理的問題も考慮に入れて、クライアントと医療者が十分に話し合った上で、その後の対応について考えていく必要があります。まだ新しい分野ですが、なすべき役割が大きいことを実感しつつ、勉強・研究に励む毎日です。